

誰もが暮らしやすい社会へ

～障害のある人が紡ぎだすもの～

社会福祉法人 訪問の家 理事長 名里 晴美

訪問の家は、1986年、横浜市栄区桂台に、重症心身障害児者といわれるたいへん重い障害のある方の通所施設「朋」を開設した。当時、高級住宅街の真ん中での建設に、「障害者施設はなじまない」という反対の声があった。紆余曲折を経て開所に至り、以来30年を超える年月を、ここで過ごしてきた。今、この街に漂う優しい空気には、重い障害のある人の存在が大きく関与していると感じている。

自分の住む街のことを考え、活動する人たち

障害者施設建設反対の声があがった時、「本当にそうだろうか」と考えた住民の方々がいらした。「自分たちの住む街に、どんな人が何を求めて“ここにきたい”と言っているのか、よく知らないで反対していいのか」と。住民の方々が、設立代表者である日浦美智江氏（訪問の家前理事長）を招いて自主的な勉強会を開き、障害者地域作業所だった朋に障害のあるみんなに会いに来てくださった。おそらく初めて重い障害のある人に出会い、それぞれの心の内で、この人たちを自分たちの住む街から排除するのではなく、「共に生きる」ことを選択されたと推察する。その方たちは、朋開所と同時にボランティアグループを立ち上げ、長年、様々な形で訪問の家を応援して下さることになる。

人と出会い、気持ちを往き交わせる活動

朋のメンバー（朋では通所している人を「メンバー」と呼んでいる）には、知的にも身体的にも重い障害がある。毎日の健康面の維持を含め、身の回りのほぼすべてに、他者からの助けを要する。コミュニケーションは言葉では難しく、表情、視線、声、手足の動き等を頼りに、その時々気持ちを周りが受けとめる。面白そうなる事に期待するように目を見開いたり、頬を緩ませたり。誰かからの話しかけに耳を澄ませ、嬉しそうに笑顔になったり。一人では難しい作業でも、手を添え、じっくり行うことで、その活動を味わい、達成感を感じている表情も見られる。朋では、一人ひとりが様々なことを感じ、経験や楽しみを広げること、いろいろな人と出会う活動を続けてきた。クッキー、ジャム等自主製品の製作と販売。近隣宅への空き缶の回収。野菜や花を育てる園芸作業。隣接する保育園、小学校、中学校との交流も長年続けてきた。小学校との交流を始めた当初、スタッフと共に、全身に力を入れ「オー——！」と声を出してあいさつする朋メンバーの姿を、生徒たちはじっと見つめ、何かを感じ取っている様子だった。身体は不自由でも、いろんなことを楽しんだり、頑張ったり、「僕たちと同じ」と感じたのかも知れない。こうした交流を経験した小中学生は、32

年の間に2,000人近くにのぼる。中には、卒業後、訪問の家の職員になった人もいる。朋メンバーが入院した病院の看護師から、「私は桂台中学校の出身です。朋と交流して自分も役に立てたらと看護師になりました」と声をかけられたこともあった。そんなエピソードを聞く度、出会った人と影響を与え合う、メンバーの存在の大きさを痛感してきた。

この街の人たちのまなざし

朋開所以来、地元自治会主催の夏祭りや運動会にも参加させていただいている。30年前、メンバーのペースで競技に参加し、運動会の進行を遅らせた時、当時の自治会長は、「こんなことが待てないよじゃ、一緒に生きていけないよ」と言ってくださった。今年の夏祭りも、多い時には50台を超える車いすの人が、地域の人たちと入り混じって盆踊りや出店の買い物を楽しんだ。こどもから大人、お年寄りまで、たくさんの方が集まる盛況な祭りである。そんな会場で、車いすの人、障害のある人を特別な目で見るような視線は、一切感じられない。

訪問の家は、朋の隣接地にある横浜市桂台地域ケアプラザも運営している（指定管理者制度）。ケアプラザは、高齢者のデイサービスや居宅介護支援事業（ケアマネジメント）、地域包括支援センターの業務に加え、地域活動交流事業等、地域の課題に住民自ら取り組む活動を支援し、共にを行っている。連合町内会支えあい連絡会の事務局も担う。昨秋は、この支え合い連絡会の協働福祉講座として、町内会の役員や民生委員、児童委員等と、地域にある障害者施設の職員が一堂に会する集まりがあった。

はじめに、昨年7月に相模原で起こった障害者施設殺傷事件の後に制作され、朋や訪問の家のグループホームも取り上げられたNHKの番組を観た。そして、これからこの地域で、住民と障害者施設がどのようにつながり、関わっていけるかをディスカッションした。この集まりに、施設関係者約20名の他、地域の方々100名近くが集まった。「どんな施設なのか?」「どんな手伝いを望んでいるのか?」「もっと知りたい」といった質問や意見が多く聞かれ、この街の人たちの関心の高さを痛感した。

人と人が出会い、相手に思いを馳せ、わかり合えたと感じられる瞬間は、何ものにも代えがたい。重い障害のあるメンバーは、そうした人と人が関わることの意味や喜びを、関わる相手に感じさせる。障害のある人もない人もみんな一緒に、長い年月をかけ、この街で紡ぎだされてきたものが、確かにある。

（なり はるみ）